水谷公民館だより

編集　水谷公民館だより編集委員会
発行　富士見市立水谷公民館　富士見市水谷１-13-6
TEL049(251)1129　FAX049(255)9886　✉fkm-mi@coral.ocn.ne.jp

↑カラー版はこちらのＱＲコードからご覧いただけます。

↑市内最新の発掘ニュースはこちらをご覧ください。

富士見市は遺跡の宝庫です。皆さんがご存知の水子貝塚の他、大小の遺跡が点在しています。

古代には奥東京湾、入間湾といわれる湾が奥深く入り込み、荒川、新河岸川、柳瀬川などの河川が武蔵野台地を削りその台地縁辺部周辺を中心に遺跡が点在しています。それらの多くは農地の下に眠っています。

時が移り、世代交代と共に色々な事情により農業人口の減少が顕著になり、宅地化が進んでいます。今後もこのような状況に拍車がかかるのではないでしょうか。

この号では正網遺跡を取り上げてみました。皆さんも遺跡に足を運んでみて、少しその時代に想像を巡らせてみてはいかがでしょうか。

担　当　河野編集委員
執筆者　富士見市教育委員会生涯学習課

水谷の埋蔵文化財

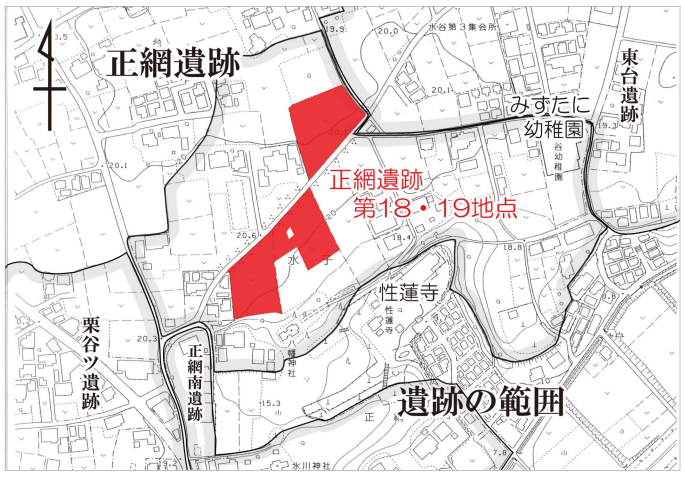
④速報編―正網遺跡の発掘調査―

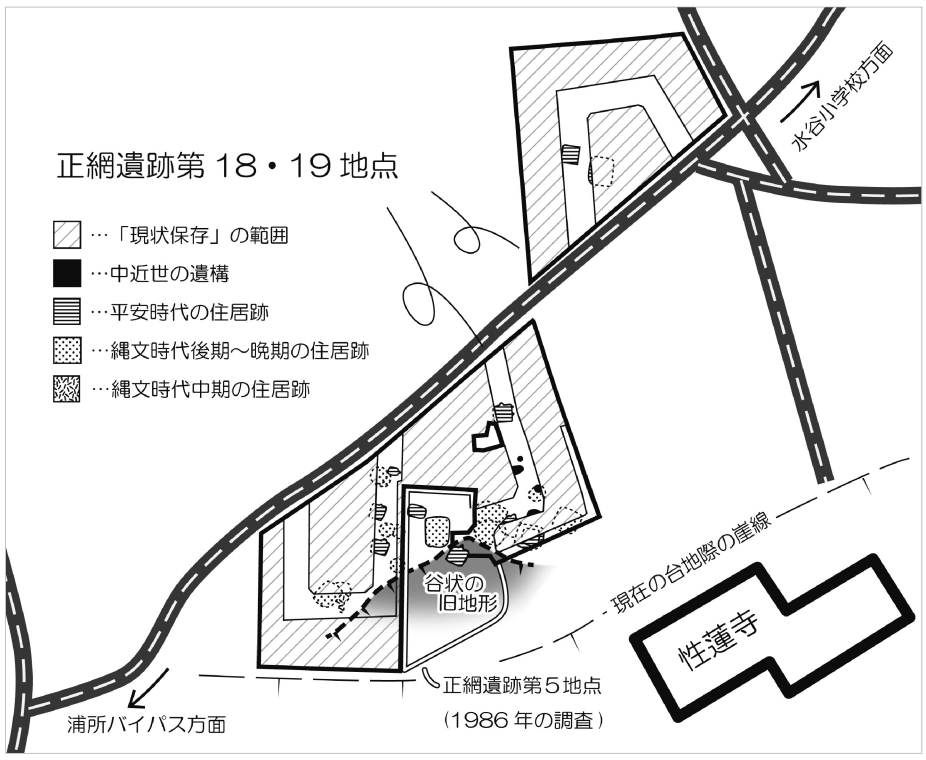
富士見市正網遺跡

富士見市大字水子の正網遺跡は性蓮寺北側の、柳瀬川の流れに面した武蔵野台地の縁辺に位置し、その台地上に広がっています。

遺跡の南端では台地が急傾斜で落ちこんでいます。東側には東台遺跡、西側には栗谷ツ遺跡が隣接しています。台地下では湧き水があることが知られており、かつてこの遺跡に住んでいた人々も、この水を利用して生活していたかもしれません。

正網遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中世の地下式坑などが確認されています。遺跡の中心部では、縄文時代後期・晩期の縄文土器「安行式土器」が地表で採取できることが知られており、富士見市史でも紹介されました。





正網遺跡第18・19地点調査発掘―発掘調査最新速報―

縄文時代後期・晩期は、今から約４５００年前から２５００年前の時期にあたり、長く続いた縄文時代の終わりに近い時代です。水子貝塚などで貝塚を伴う集落が営まれた縄文時代前期や、勝瀬の中沢遺跡やみずほ台の松ノ木遺跡などで環状集落が広がっていた縄文時代中期に比べると、寒冷な気候になっていたと考えられています。自然の恵みを日々の糧としていた縄文時代の人々にとってその影響は大きかったのか、この時期の関東では住居跡の数が大幅に減少します。住居の数がそのまま当時の人口と比例するとは限りませんが、少なくとも縄文時代中期に比べて、人口が減少傾向にあったことは確かなようです。

富士見市もその例外ではなく、市内59か所の遺跡のうち、縄文時代後期初頭以降の住居跡や土器が発見される遺跡は、関沢の本目遺跡、東みずほ台の打越遺跡、そして水子の正網遺跡をはじめ、わずかです。そのような状況の中で注目されたのが、１９８６年に行われた正網遺跡第５地点の発掘調査でした。性蓮寺の裏手に位置するこの地点では、縄文時代後期後葉（約３３００年前）の住居跡１軒と、多くの縄文時代後期・晩期の土器片が発見されました。近隣市町ではこの時期の遺跡は発掘調査の例が少ないということもあって、正網遺跡第５地点出土の資料は、縄文時代後期・晩期の荒川右岸を考えるうえで重要な資料として評価されるものでした。

縄文時代後期の竪穴住居跡（生涯学習課提供）

発掘調査の風景（生涯学習課提供）

そして昨年、正網遺跡の中央部に広い範囲で開発が入ることになり、それに先立って正網遺跡第18地点、同19地点で発掘調査が行われる運びとなりました。

今回の調査では、調査区の一部を現状保存（発掘調査をせず、保護層を残して土中の遺構・遺物を後代へそのまま残すこと）とする形での調査でしたが、それでも出土する遺構や遺物は多量であり（土器や石器が、一抱えほどある大きさの整理箱で60箱近く出土しました！）、期間も約2ヵ月に及びました。調査が終わって間もない現在では内容を整理しきれていない図面や遺物も多いのですが、新しい知見も多くあり、大変有意義な調査となりました。

平安時代の竪穴住居跡は、合わせて10軒以上見つかりました。正網遺跡と隣り合う東台遺跡でも平安時代の住居が多数見つかっており、連続する集落として捉えることができるかもしれません。また、いくつかの住居跡からは布目瓦の出土があり、竈の補強材として用いている例もありました。当時の一般的な住居は瓦屋根ではなかったので、寺院などの特別な建物や、瓦を作っていた窯などが近くにあるなど、瓦が手に入り易い状況だった可能性が考えられます。

縄文時代後期・晩期の竪穴住居跡や土坑も多く見つかりました。場所によっては住居跡や柱穴が重なり合い、元が住居跡何軒だったのか現在分析中の部分もありますが、少なくとも８・９軒の竪穴住居跡があったと考えられます。縄文時代には現在よりも低地が台地側に入りこんだ谷のような地形になっていて、その開始点の北側を半円状に囲む集落があった様子が伺えます。日常の煮炊きに用いた土器の出土も多いですが、それに加えて耳飾りや垂飾り、土偶、石棒など、儀礼的・祭礼的な用途が想定される遺物も目立ちます。このような遺物が増えるのは縄文時代後期から晩期の遺跡の特徴であり、気候の寒冷化に伴って生活を変化させていく中で、祈りを捧げたり、美しく身を着飾って立場や権威を主張する機会が増えていたのかもしれません。

弥生時代に入ると、市内の遺跡の数は縄文時代後期・晩期に比べて一気に増加し、観音前遺跡や東台遺跡など、水谷地区の柳瀬川流域をはじめとした多くの地点で集落が広がっていきます。終わりゆく縄文時代と、幕を開ける弥生時代の狭間で、正網遺跡の人々はどのような生活をしていたのでしょうか。第18・19地点の現状保存部分の調査も含めた、正網遺跡の今後の調査にも注目です。

土偶の破片（写真中央）（生涯学習課提供）の出土状況

第18・19地点で（生涯学習課提供）出土した耳飾り